

インクルーシブな国語科授業を実践するために

—教材としての絵本の可能性—

関西学院大学 ◆原田 大介／筑紫女学園大学 ◆稲田 八穂

一 ワークショップの概要

「インクルーシブな国語科授業」を言い換えると、「多様性を包摂することばの学び」となる。ここでの多様性とは、多様な子どもたちの存在はもちろん、多様な価値観・文化・考え方も含む。国語科授業という場は、学習指導要領が象徴するように、とても政治的な場でもある。子どもたちにとつて、国語科授業という場を少しでも意味のあるものにするためには、その凝り固まった政治的な文脈をずらし、その意味を和らげることで、多様性にひらかれたものにしなくてはならない。

「多様性を包摂することばの学び」を考えると、絵本という教材は可能性にあふれている。この理由は、原田（二〇一九）でも触れたが、確認しておこう。

第一に、絵本では子どもたちの多様な身体や多様な生活背景が描かれていることが多いため、教科書教材だけでは

触れることができなかつた多様な価値観に子どもたちが触れることができるという利点があるからである。第二に、絵本は、たとえば漫画やアニメ、ゲームなどと比べると学校で用いることに対して「抵抗」が少なく（漫画・アニメ・ゲームの立場が学校内で弱いことの問題は別に議論する必要はあるが）、教員が教材として用いやすいという利点があるからである。第三に、絵本が保育現場で用いられているように、その内容は言語（バーバル）だけでなく、「絵」という非言語（ノンバーバル）を中心に構成されているため、教育的な支援を要する子どもたちが学びに参加しやすいという利点があるからである。

インクルーシブな国語科授業を実践する方向性はいくつかあるが、絵本の教材としての利点を踏まえると、「①既存の教科書教材と絵本をあわせて用いたインクルーシブな国語科授業づくり」と「②多様性を描いた絵本から考えられるインクルーシブな国語科授業づくり」という、二つの

観点を軸にしてすすめていくことが考えられる。①は、既存の国語科授業に絵本を組み合わせていく立場であり、教科書教材に縛られる学校現場の実態をずらしていくことでインクルーシブ化を目指す立場である。②は、既存の教科書教材から離れて、子どもたちの実態を踏まえた絵本を中心に、新たな教材をラディカルに開発することでインクルーシブ化を目指す立場である。多様性にひらかれた授業開発や教材開発が求められている点では、①と②は共通する。

二 残された課題

本ワークショップの後半にフロアの住田勝氏より意見をいただいたように、子どもたちがことばの学びに参加する媒体として絵本が他のメディアと比べて有効である理由については、国語教育、ならびに教育学全体の理論として十分に深められていない現状がある。現場にかかわる実践者や研究者による「経験知」や「臨床的な勘」のようなものは散見されても、絵本の有効性がある程度一般化して説明するだけの教材研究は十分に展開されていない。

子どもたちがことばの学びに参加する媒体として、絵本が有効であるのはなぜか。ここで一つの仮説を述べるのであれば、絵本には他のメディアと比べて、「絵」という非言語（ノンバーバル）を入り口に、子どもたち一人ひとりの通時的・共時的な出来事を想起させる機能が少なからずあることが理由として考えられる。私たちが絵本を手にし

て読むときにどこか懐かしい気持ちになったり、親しい人とその絵本について話してみたくなったりする、あの感覚である。絵本に触れているとき、子どもたちは、より幼い時に、確かにその絵本をおもしろいと感じた「私」の思いや感覚を発見したり、絵本を読んでもらった「私」をめぐる周囲との関係性を思い出したりしている。そして、その思いや感覚が子どもたちのリカバリー（回復）として機能し、子どもたちのことばの学びを誘う役割を少なからず果たしている。このように考えると、絵本の教材研究を含め、子どもたち一人ひとりの通時的・共時的な出来事を国語科授業の場で想起させることばの学びの可能性（危険性も含む）や、子どもたちがリカバリー（回復）することばの学びとの関連性等についても、国語教育の理論や実践の研究として取り組む必要があることがわかる。

また、子どもたちの中には、多様な生活背景から絵本をめぐる「私」の記憶が十分でないことも考えられる。絵本を含む、さまざまなメディアとのよりよい関係を国語科授業の場で行くことも目指す必要があるだろう。

※ワークショップで質問や意見をいただいた皆様に感謝申し上げます。なお、本稿の文責は原田にある。

注1 原田大介（二〇一九）「国語科教育のインクルーシブ化に向けて—多様性を描いた絵本—から考える」日本国語教育学会

編『月刊国語教育研究』No.568、二八頁—三二頁